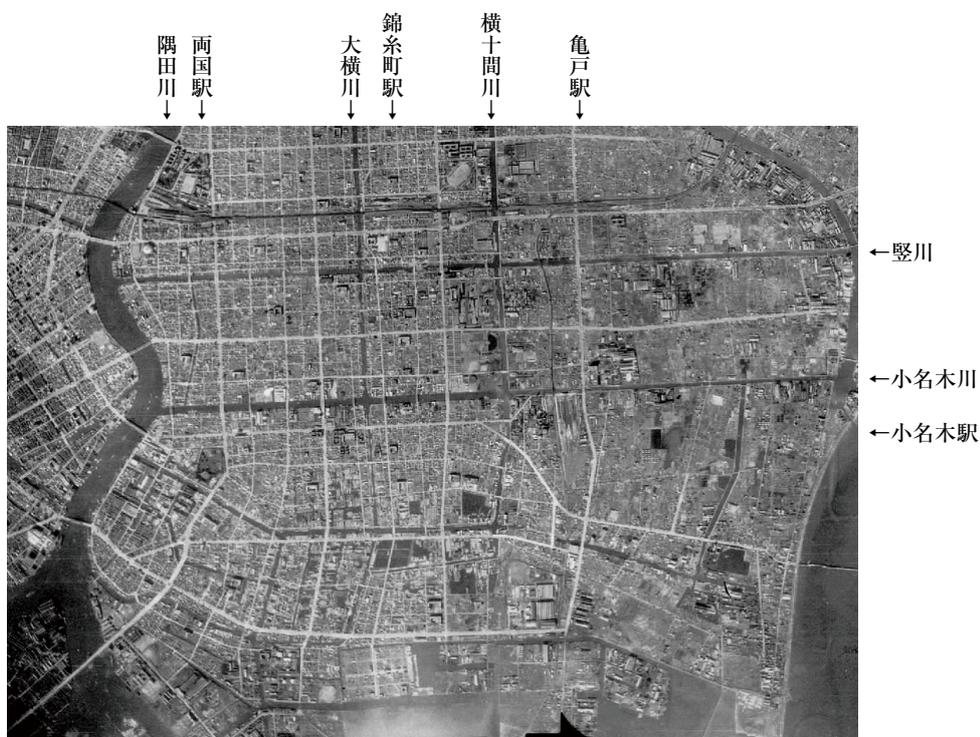


今月号から「旧木場の歴史」を紹介致します。お知り合いの方で「旧木場」の歴史について詳しい方がいらっしゃいましたら、月報委員会までお知らせください。

「本所木場」 思い出の記

東和木材(株)
井上 哲男



復興途上の木場周辺 1948（昭23）年米軍空撮 国土地理院

§はじめに

筆者は幼少の頃より材木と製材工場の中で育ちました。高校時代から休み時期には置き場や納屋の整理整頓を手伝って来ましたが、東和木材株式会社（以下弊社）に正式に入社したのは1957（昭32）年です。以下弊社の略歴を記します。

祖父四郎：1917（大6）年 深川（現江東）区扇橋で挽材業を開業

父信一：1937（昭12）年 深川区猿江に製材工場を作り移転

：1942（昭17）年 戦時統制経済により廃業

：1948（昭23）年 江東区高橋（現森下）で木材業再開

：1949（昭24）年 墨田区豎川（現立川）に東和木材株式会社設立

という次第で、筆者の目線は挽材屋になりがちですが、この点ご容赦ください。

§ 本所の木場

言うまでもなく木場の木材問屋は小名木川を境として北側を本所木場、南側を深川木場と大別してきました。弊社は本所木場で秋田材の製材品・原木問屋として戦後のスタートを切りました。前頁の航空写真にも見られるように一面焼け野原の状態でした。再開時の我が家は浦和(現さいたま)市にありました。現在の社名は東京と浦和が由来です。筆者は浦和から高橋の店まで用足しに出ることがよくありました。錦糸町駅からは高橋まで歩くのですが、豎川沿いのN製材工場の屋根が見事な迷彩色に塗られていたのに驚きました。話を聞くとN社は1945(昭20)年3月の東京大空襲からいち早く工場を再建し、その後始まったF6FやP51の機銃掃射から工場を守る為だったそうです。焼け野原の中であの屋根はむしろ目立っていたのではないかと考えています。社長のN氏と信一は戦前から懇意にしており、開業早々に秋田杉の造作材や建具材の製材を始める事になりました。以来、秋田の板物と建具・造作材を扱いながらN工場でも米材・南洋材の製材を行ってきました。

入社当時、大横川をはさんで東側は柳原(現江東橋5)から猿江1丁目まで、西側は豎川(現立川)4丁目から高橋(現森下)5丁目まで、本所木場の問屋筋が出揃っていて、河岸に面した倉庫と道路を挟んで問屋の店と林場がずらりと並び、多くの倉庫には川側に^{はしけ}船取りができるように搬入口が付いていました。立川4丁目の荷馬車の溜まりであった屋敷跡は日東市(昭26開市)となり、市日には仲買業者で賑わっていました。

大横川は南洋材、米材、秋田材、北海道材の筏が両岸に係留され、筏の上を立川から森下まで歩いて行ける状態でした。東側の製材工場は自社堀を持った工場が2社あったと記憶しています。江東橋5丁目の大門通りに、なだらかな起伏がありますが、これは堀を越す橋の名残です。西側には川から直接丸太を引き上げるF社工場がありました。引き揚げ作業中は当然通行止めになりますが、これに関するクレームは無かったようです。弊社もよくこの工場に製材をしました。

当時木場への木材輸送は鉄道輸送が中心で、錦糸町・両国・小名木・南千住の貨物駅が使われていました。また、紀州からは機帆船による海上輸送が盛んで、大門通りの突き当りにあった東電堀(現東京メトロ整備場)埠頭から船取りで大横川沿いの問屋倉庫に運ばれていました。錦糸町駅には堀があり船取りや丸太の筏組も出来るようになっていました。



大横川の風景 手前の橋が菊川橋(都電の架線が架かっている) その奥が菊柳橋 1960年頃

§ 豎川から有明

昭和32年の日本は「貧乏人は麦を食え」の時代を脱却し高度成長期の入り口に立っていた時です。木材需要は増加の一途をたどり、木場の製材工場は繁忙を極めN社も豎川から大横川沿いに第4工場まで増設していましたが、地挽問屋も増えて挽番も思うように取れない状況となりました。弊社は他の4社に

も依頼して賃挽きをしていましたが、製材の立会いや製品の整理と輸送の問題もあり、堅川沿いに100坪の土地があったので、そこに製材工場を建て製品を集約化することにしました。工場は年内に竣工し試運転も終わり、33年はじめから本格操業することになりました。

同32年、東京都は木場の合板・製材工場を対象に10号埋立地(現有明)の払い下げ(第1次)を発表しました。木場移転計画の一端としていたものでしょう。34年の第2次払い下げは4千坪が2区画、2千坪が5区画であったと記憶しています。100坪ほどの工場で有明に進出するのは大変不安なことでしたが、金融機関の支援もあり、不要不急の不動産を処分して34年に2千坪区画の払い下げを受ける事が出来ました。

都の移転計画の引き金となったのは1949(昭24)年のキティ台風ではなかったかと筆者は考えています。この台風による高潮は、地盤沈下に悩み河川と堀割の多かった木場に大きな災害の爪痕を残しました。弊社の高橋倉庫は大横川と小名木川の交差したところにあり、護岸が大きく破損倒壊したため、置き場にあった荷下ろしが終わったばかりの製材品がすべて流失してしまいました。開業翌年の出来事です(閑話休題)。

立川から三つ目通りを南下して菊川・白河・木場・塩浜・枝川・豊洲・東雲・有明迄の所要時間は10分足らず、東雲都橋を渡ると左手は飛行場とゴルフ場(東雲ゴルフクラブ)で、曲打ちで有名な中村寅吉(通称寅さん)プロが専属と聞きました。驚いたのは右手の貯木場側に大手原木問屋N商店の事務所があり、その先にH社の突板工場が操業していたことです。その先見性には敬服しました。10号地はL字型で先端に出光興産の貯油タンクがあり、内側が有明(通称16万)貯木場となっていました。払い下げ地総計1万8千坪は草原で、空には雲雀がさえずり地上には青大将がその巣を狙って潜んでいるという自然そのものでした。ゴルフ場の海側は埋め立て工事が進行中で、後にゴールドラッシュで世間を騒がすことになった所です。10号と造成中の13号の間に上総滞かづさみおと呼ばれた水路があり船の解体工事現場となっていました。



有明より望む東京港



有明より望む豊洲(東京ガスと新東京火力)

当時の有明はまさに江東区の最果てで、電話線もなく立川本社との連絡は都橋際のN商店の電話をお借りするかバイクを飛ばして立川まで行く(6分!)、水道は通っていたものの生活排水は下水管につなげないという状況でした。有明のインフラはともかくとして、なにより困ったのは貯木場が浅かったことです。干潮時には干上がってしまっただけが動かせず、丸太を引揚げる事が出来ません。最初の工事は浚渫工事となりました。

都は木場の移転先として13号埋立地(現臨海副都心)をこれに充てる予定でした。しかし1959(昭34)年の伊勢湾台風による被害は、貯木場の原木流出によるものが多かったため、移転先が14号地(現新木場)に変更されたことは、有明が新生木場への主要通路になるであろうと期待していた筆者にとっては少々ショックでした。



貯木場の浚渫工事

以上

§おわりに

本文はざっと70年前からのスタートですので、筆者の記憶違いや誤解によるものが多々あると思います。その点ご指摘、ご教授頂けると有難く思います。